

小説

# タイタニック委員会 Ⅱ序Ⅱ

稲瀬 隆

## 一 大海原

風に向かって大きく手を広げ、全身で風を受ける。まるで空を飛んでいるようだ。目を開けば眼前に広がる大海原が見えるだろう。足元から伝わりくる振動が、遙かな水平線に向けて洋々進みゆく船の機関の躍動を教えてくれる。豪華客船タイタニック、処女航海の映像が閉じた瞼の裏に浮かぶ。

セリーヌ・デオンが優美に歌う。。。

「にいちちゃん！！『通せんぼ』やめて、どいてくんねエかなア」

目を開けて振り返ると、ユニボを乗せた軽ダンプから、

ヘルメットの運チャンが困り顔で怒鳴っていた。頭から

優雅な、Near. Far . . . のメロディが消し飛んだ。

「はあ・すいません・・・・」

視線を戻せば目の前は砂塵が舞う丘の上。パルテノン神殿やシェーンブルン宮殿、はたまたタージマハルにまで似せた、「勘違い豪華」な建屋が並んでいる。

今、ボクの目の前にあるのは、激しく変動する潮流の中で、迷走の末に難破した一事業体の残骸である。

ここはかつて、とある大学のキャンパスだった。

人生、いつが一番コワイ瞬間かって、それはきっと、気づいたらもう手遅れだ、逃げ場がないって分かった時だ。そこで深く観念するか、万分の一にでも賭けて足掻くか、人はそれぞれだ。だがいずれにせよ、およそあらゆる危機には、手遅れになる前に必ず予兆がある。なん

らの警告があるものだ。それをきちんと受け止め、活かさぬ者に、悲劇はあたかも突然かのように降ってくる。

かのタイタニック号はその典型だ。運命の氷山に遭遇するまでには何通もの警告電信を受けていたのだ。

衝突一時間前には、氷山群に閉じ込められた他船から、重大な電信を受け取った。だがこの最後の警告は、処女航海で沸く乗客たちの「ご祝儀電報」に埋もれ、隅に追われ、葬られた。「じゃまするな」それが通信士から発信船に返された電文だった。危機を察知すべき「聞く耳」が無かった、ということだ。

「見る目」にも重大な欠陥があったようだ。前任者から双眼鏡保管庫の鍵を受け取り損ねた見張り番は、夜霧の闇の中で、肉眼目視を続けねばならなかったという。有名な「ハインリッヒの法則」には、例のトライアン

グルモデルのほかにも、ドミノ理論というのがある。小さな不運の連鎖が事態を増悪させて、しばしば大きな悲劇を生むってことだ。

そんな役立たずの「目」や「耳」の上に「鈍感な頭」つてのが乗ってた日には、もう救いようがない。そもそも「不沈船」と謳われたタイタニック号では、まともな避難訓練などなく、救命ボートも足りなかった。だが、危険海域に向けて舵を切った船内で船長は、次々お声がかかる「VIP」たちの接待に追われ、料理のメニューやパーティーの段取りに気を取られていた。で、その瞬間。号の脇腹が氷山に切り裂かれた時、船にはほとんど衝撃がなかった。ラウンジでは、緩やかな「緊急停船」に気付いた客が少しざわついただけで、パーティーは優雅に続けられた。お祝い気分で乗船し、後に優先救助された社主たちは、グラス片手に航路の再検討に入った。まだ誰も、この最新鋭「不沈船」が沈むなど夢想だにできなかったのだ。唯一、この船の設計者を除いて。衝突から二〇分後、救難信号が発信され、一時間後に最初の救命ボートが降ろされた。そして二時間半後、船はへし折れて海中に没したのだ。犠

死者は千五百人を超えた。

さて、今は某国『パクリン・パーク』の残骸のようなこの丘陵地。かつては明総学館東京国際情報栄養人間総合科学大学（長すぎるので以下「明総大」）のキャンパスだった。

世の中、およそなんでも「老舗」ってやつは名前が短い。後発組ほど名前は長くなる。「東・西・南・北」は当たり前。「新」を付けたリ「ニュー」を付けたリ、果ては後出しのくせに「元祖」を付けたリする。だが、老舗ってのは単なる歴史の長さで決まるもんじゃない。エスタブリッシュされてこそその名に値する。というワケで、この明総大はその法則の典型例ってことになる。

そもそも「東京」が付いてはいるが都内にはない。都心からは優に一〇〇km以上離れていて、東京ペケペケランドや、新東京〇〇空港の比ではないが、同じ土俵にのっていると言えなくもない。明総大の基となった明総女学館は大正六年、辺総の婦女子教育のために開かれた。つまり名前に負けず、歴史も長い学校なのである。昭和二六年に栄養士養成施設の指定を受け、昭和四〇年に

家政短大となって管理栄養士養成課程を設け、当時の受験生増加を見込んで幼児教育学科と英文学科を開設した。元号が平成に変わる頃、陰り始めた短大を店じまいして四年制大学に脱皮すべく男女共学とし、その後のブームを狙って情報と人間を名称に入れた。二年後、英文学科組織を国際コミュニケーション学部昇格、大学名に東京と国際を冠した。五年後、この学部はマネージメント学科を加えてインターナショナル・コミュニケーション・アンド・マネージメント学部と改称、日本一長い名前として若干の注目を浴びた。そこで味を占め、一八歳

人口の減少が間近に見え始めた平成一四年、時の中協審答申で掲げられた「リベラルアーツ」を組み込んで、世界一長い名前にしてギネス申請を画策するも、文武価格省よりキツイ「指導」を受けて断念した。この際、マーシャルアーツもリベラルアーツだと豪語して、大綱化に伴う体育外しの巻き返し図る体育系が張り切る異常事態も起きた。また、答申を踏まえ、高い教養を求めるリベラルアーツ・カレッジをめざすのか、地域に密着したコミュニティ・カレッジをめざすのかも激論となった。旧短大系。情報系、国際系の三派が三つ

巴でもめ倒し、いずれとも不明確なままの妥協案（俗称ロン・パリ協定）によって、「総合科学」が大学名に入れられた。これらの大幅な再編と設備投資にも関わらず受験生に減少には止めが掛からず、その後の理事会による看護学部設置提案で、混迷は更に深まった。

おっと失礼。自己紹介がだいぶ遅くなった。

小生はタコである。名前はもうない。

いやきちんと言っておこう。正しくは「毛内多寡雄」。

学生からは「タコ」、同僚からは「坊ちゃん」と呼ばれていた。先月まで大学准教授だったが、ただ今現在は。

一介の医者である。

毛内家は津軽藩に仕えた由緒ある家柄だ。苗字を書く度にそう説明するので、皮肉屋たちが「坊ちゃん」と呼ぶようになった。それでもなお無礼にも『毛無』とか書く不届き者がいて、不愉快千万である。世が世なら手打ちにしてやりたいところだが、ボクは漱石の「坊ちゃん」ほどガサツな乱暴者ではない。

六年前、ここに赴任したころは、まだ前期研修を終えたばかり身だった。法律的には一丁前の医師ではあった

ものの、継がねばならぬ病院はなく、どこぞの病院の常勤医になって終生「お医者さん」をする覚悟もなかった。さりとて自分が研究に向いているとも思えない。進路を決めかねていたところに部活の先輩から、とある大学が医師免許を持った教員を探している、と聞いた。このままアルバイト医を続けるのでは六年間の学生生活、いや浪人時代を含めれば九年間、支えてくれた家族に顔向けできぬ、とて定職に就くことにしたので。

ちなみにあだ名の「タコ」は「タカオ」の発音に生じたリエゾンだと信じている。はじめてあだ名を聞いた時は不愉快だったが、今では存外悪い気分でもない。タコは結構、知的な動物なのだ。鍵付きの箱にエサを入れた実験では、他者の行動を見て学ぶ力があった、という。かのHGウェルズが、タコをモデルに火星の知的生物を想像したもの、あながち的外れじゃあなかったのだ。とはいっても、六年前を冷静に振り返ると、「タコ」が「タカオ」の音便でないような気がしないでもない。ソレは歓迎会の大騒動だった。

二 歓迎会

三月もどん詰まり、三〇日の土曜日に突然、泊りがけの歓迎会に呼ばれた。少々意外なタイミングだったので電話口で「この時期に恒例」なのか聞いたところ、「異例です」と言われた。まるでボクのためだ、と言わんばかりの口ぶりだ。そこで「いつもはいつ頃」かを何気なく聞くと「決まってる」のだという。何のことはない。毎年トップが自分の都合で決めていたのだ。今回の「異例」が「時期」でないことは当日分かった。

周囲数キロ、めばしい施設が何もないような田園地帯の丘の上にその会場、割烹旅館「丘猪荘」があった。この辺総の地においては、別名「ヒル・トン」と称され崇められ、地元有力者の冠婚葬祭はもちろん、保守系市議、県議の選挙出馬表明やパーティーもここで開かれる。この一帯では帝国ホテルに料亭金田中を入れ、鹿鳴館まで合わせちゃったような上流階級の社交場で、この丘はまさに権威の宿る頂きなのだ。宿泊料や料理の舌代は、べらぼうに高い。それが「権威」の勘違いか、「田舎者を馬鹿にすんな」の心意気かは分からない。もつともこの丘の高さは二〇m足らず。高い料金設定も、よそ者へ

の見栄で構えた高塚だ。地元お得意さんからはその半分も取らなかつたのだから。ちなみにこの宴会の五年後、トリカゴとか薬天とかのサイトで、格安料金プランを乱発した挙げ句、あえなく閉館した。借金が数億円あったそう。踏み倒しが多かったのだろう。「おかしいそう」というより、全く「おかしいそう」だ。出席者は常勤の教員・職員ほぼ全員、合わせて六十人ほどだった。おどろいたことに、県の副知事まで来ている。なんでも地元の名士だそう。後で知ったのだが、今回の日程は彼に合わせたものだった。ボクのアルバイト先「藪名クリニック」のハナシも副知事経由だったらしい。長年、地域医療を支えてきた老医師のサポート役が期待されちまつたようだ。副知事の地元貢献に、ボクが手助けするって構図。学長はこれで県に貸しが出来た、って寸法だ。

「まあセンセイ、一杯ぐつとあけてください。」と、なんだかよく分からないお歴々の挨拶の後、上機嫌の学長が自らビール瓶を片手にやってきた。「センセイにはぜひ教務委員で、お医者さんの視点からのテコ入れをお願いしたい。それに、地域医療を通した大学地域連携プ

ログラムへの貢献も大いに期待していますよ。」と勝手なリクエストを並べ、「あとで一言、いただきますが、まあ、まずはリラックスして・・・」と去って行った。しかしこちらはリラックスどころか、ビール瓶が次々にやってきた。学長の顔色を伺うように、まずはカニのような顔をして甲高い声で話す教務課次長、次いでオコゼみたいにぎよる目でエラの張った教務部長とセイウチみたいなガタイのいい学生部長がやってきた。教務部長は、よく役所の窓口に居そうな人物で、学生部長は見るからに体育系だ。後にオコゼは県庁から、セイウチは県警からの人事と知った。まるで県立だ。因みに両教授の学位論文は、学長が母校の院生に「奨学金」を積んで書かせたという噂もあった。

いい加減、酔いが回って頭が真空になった頃、挨拶はこの春、去る人々に進んでいた。2、3名ほどの昔話を遠く霞の中で聞いたところで、ボクの名が呼ばれた。

「ではこの次に新たに赴任された方々から一言。まず、東京の東慶大からいらした、毛内先生にお言葉をいただきます。」

元来、酒はあまり強い方じゃない。コップ一杯のビー

ルで耳まで真っ赤になる。今日はそれが「人格の致死量」を超えるレベル。しかもボクは焦るとドモる質だ。「え、えー、わた、わたくしは、このたびえ、えー、その、あのですね・・・」まるで言葉が浮かんでこない。浮かんでくるのはカニだのオコゼだの、口にしたら取り返しがつかなくなるような単語ばかりだ。で、ふと口を突いて出たのは、

「水族館！」

しーん、となった。不審そうにカニ長が言う

「スイゾク??めいそう学館ですが??」

「まずい!と思えど、舌も思考も制御不能だ。」

「あ、ひつ礼 その、迷走し・・・学館に、不妊の外來、じゃなく、赴任したも、もうない!」

思わず目の前のカニ長に頭を下げた。

「かに!・・・あ・・・堪忍・・・すので。弱体者で・・・」

「センセイ、唄でもいいですよ」

ちよつと遠くから声がかかった。

「そうだ、なにか一曲!若いんだから・・・」別の声、いらぬ助け船を出した。

んん? スピーチできないから、って、若いからって、

「唄」ってなんだよー！　そもそもボクはカラオケなんか大嫌いだ、中学校の合唱祭以来、人前で歌ったことなんかはないのだ・・・」

と、そこに隣の宴会場から、

『チャあ・ンちゃ・んチャ・んチャ・んチャ・・・なあみいだがつっ・こつぼれっないようおうおうに・』

どっかで聞いた懐メロが漏れてきた。どうしたことか、これがズレまくった酩酊認知回路には裏拍子のリズムで聞こえてしまった。

運命のポイントが切り変わった。マイクを持たされた頃には、頭の中がすっかり、ボブ・マーリーのワン・ラブで一杯だった。

「ワァンラブ・レッツゲツ・・・オール・・・」

覚えてるのはサビだけで、あとはハミングでうなるだけ。体を揺らしやあソレらしい。酔いと照れとで、耳まで熱い。

それでも、若い事務員が箸を掲げて左右に振ってくれた。ちよつとノつてきた。振るならサイリウム出せ、なんて、あは、オタ芸打ってる場合か・・・、思考力オスが渦巻く頭の中は、ますます煮えてくる。

「あれは何の歌かね？」学長が若い教員に聞いている。

「レゲエですよ」

「れげい？何かね、それは。なんだか掴みどころがない歌だなあ・・・」

「ジャマイカの音楽じゃなかったかな？」

お、少しは分かるヤツもいるか、恥も少しは報われる、そう思った刹那、酔ったカニ長の一言が起爆装置をセットした。

「イカですかいな？あの踊りゃあ、タコじゃ思うた・S H A・S H a・S H a」

なにい失礼な！カニのくせに！

「まあ、タコでなくても、じゃあ、まあいイカあなんて・・・H y a H y a H y a」

ふざけんな！！で、スイッチがオン。思わずカニの手からビールを奪い取った。

「タコは当然、スミ吐く、です！」と、ビールを口に含んで、思い切り顔に吹きかけた。

カニは泡吹き、慌てて横ざまに逃げようとする。そこを逃がさず取っ捕まえて、頭にかじりつく。なにせカニはタコの大好物なのだ。

「逃がすか！これがボク流の挨拶じゃあ。。。。」  
そう怒鳴った、あとの記憶はない。

翌日、バカっ早く目覚めたのを幸いに、朝明けの中、ひとり宿を出た。

田舎の朝日は爽やかで、まぶしかった。

### 三 ホームページ委員会

平成二十五年四月一日・月曜。

歓迎会・悪夢の夜から、修復の日曜日を経て、大学初出勤の朝を迎えた。

幸か不幸か修羅場の記憶はかなり臆気で、何が現か幻か、流し絵のマーブルに似た、混沌の中にあった。ここは開き直って行こう。心に決めた。どうせ全員が酔っ払いだっただ。

中古ながら可愛い愛車をコロがして大学の麓にたどりつくと、まだ八時半だというのに車が溜まっている。目を凝らすと、車体一杯にアニメキャラをペイントした「痛車（イタシヤ）」や、天井から大きなモニターとスピーカーをぶら下げた、LED満載の音響族のデコ車が何台か混じっている。有明だか大黒だか分から

ない。いずれも学生たちの車だ。リヤから手書きのプラカードやら横断幕やらを、下ろしては運んでいる。

と、今日がガイダンスなのを思い出し、クラブ勧誘だと気がついた。狙いは今日が前段の二年生、そして明日、明後日は本命の新入生だ。

学生の群れを縫ってやつと駐車場に辿り着くと、もう九時が迫っていた。初日から遅刻はマズい、とは思ったものの、どこで出勤チェックするのかが分からない。わかりにくい案内図をあきらめ、とりあえず遠くに見える時計塔の建物に辿り着いた。そこそが総合事務のある本部棟で、そしてそこに、あの、カニ長が、いた。

深呼吸して、おはようございますっ、と事務室に入ると、カニ長がビクツと少し跳ねて、振り向いた。

「あ、お・はっ、よ・うお・ぐおざい・ますう」

聞き覚えのある、甲高い声だ。やはり例の件は覚えているらしい。脂汗が吹き出たおでこに、バンドエイドが貼ってある。

こちらは努めて明るく、

「どうも、一昨日はありがとうございましたっ！」

周囲を見回し

「本日より、よろしくお願いいたしましたす！」

女子職員が顔を伏せ、クックツ、と肩を揺らした。

「出勤のチェックはどこでするんでしょう？」

「あ、それはですねえ」と、カニ長が動揺を押し殺して、慇懃に答える。「この出勤簿に押印してください」

「ハンコですか？」

「われわれ事務職員と違って、先生方にはタイムカードはありません。残業手当ありませんし。」

「え、ないんですか、じゃ、試験作成や入試作業で遅くなった時は？」

「手当はありません。弁当は出ませんが。」

「べんとおう？、それだけですか？」

「だけ！です。残業などの手当が全くないんですから。だいたい先生方はタイムカードなんてあつたら、お困りでしょう？実験なんかで夜中までいたり、休日に来たり、自由に入入りされたいんじゃないやありませんか？全部を労働時間にすると、労基法上面倒なことになりますので。」

コアタイム&フレックス制にしてくれたらいいのに、とも思ったが、今日はやめておこう。

「ご案内の通り、午後、本部で辞令交付がありますのでご出席ください。」

「え、そうでしたっけ？」

「それから、すでにメールでお送りした時間割通り、来週月曜から先生の講義が開講します。初日にはシラバスを学生にお渡しください。」

「え、シラバス？授業概要はもう出しましたよ」

「授業概要はシラバスではございません。どうぞホームページ上の作成手引きをご覧の上、お取りまとめ下さい。」

「そんなもの読まなきや書けないんすか」

「お読みなった方がよろしいと思いますよ。先生方みなさんご苦労されていますから。ぜひ、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーもご参照の上、作成なさってください。」

ん？講義について書くんだから、カリキュラムポリシーとやらを読め、は分かる。だが、ディプロマのポリシーってなんだ？。ディプロマ学位、学士

(なんとか学) っていうのはもともと、それぞれの学問領域が持つってポリシーで出してるんじゃないの？と思つた。さて、ボクが出た大学にそんなモノ、あつたんだろうか？そういえば同窓の老先生は「ぼくあずつとノンポリだった」なんて言つてたけど、あれはなんだつたんだろう？

事務のカニ長が得意げに言う。

「文価省が求めている3つのポリシーです。入学から卒業まで、大学教育の質が問われているのです。」

「へー、知らなかったなあ。」

「先生、本学のホームページ、ご覧になりましたか？」

「ああ、はい。あの、男女の学生がバカ笑いしながらジャンプしてる写真の、ですか。」

カニ長がイワガニみたいに青くなった。

「バカ笑いは余計です！彼らは理事長のご親戚です！」

危うく、バカ笑いするところだった。

「ホームページには、本学の沿革から建学の精神、学長のご挨拶とか、カリキュラムや学生の声など、

・「カニ長はだんだんヒートアップしてきた。

「あれこれ盛りだくさんすぎて、読み切れなかったもので・・・」とボク。

カニ長は食い下がる。

「どうぞもう一度、じっくりお読み下さい！」

こちらも意地になり、すこし意地悪にもなってきた。

「もう一度って、どこをどうみたらいいんですか？」  
だつてあのサイト、異様に見にくいんですもん・  
・「ここで、負けまい。「継ぎ接ぎで、とっ散らかつてつて、とんでもないとこ行くんですよ。この前なんか『本学志望の皆さんへ』を見てたら、いきなり『寄付のお願い』なんか飛んじやつて、もうめっちゃくちゃ！」

カニ長は口角泡吹いて反論し始めた。

「そんなことありまっしえん！！迷つた時には、サイトマップがありまっしゅ！」

「サイトマップだつて、どこにあるのか分かんない」

「と、とにかく！その中のどこかにデふね、本学のポリシーがうたわれていましゅ！」

興奮すると、カニ長は口角泡を吹くだけじゃなく、シュウシュウ言うらしい。今度は茹でたてのように赤くなった。とても食べる気にはならないけれど。

このやり取りが災いして、翌日ボクは、厄介なIT・ホームページ委員会に入れられた。

#### 四 入学式

四月七日、よく晴れた日曜の朝だ。まだ段ボール箱だらけの部屋を見渡し、本当ならこいつらを何とかしたいところだ、そう思いつつ、ボクはスーツに着替え、ネクタイを締めた。

先週火曜日朝の混雑に懲りたので、少しばかり早めに出て、式場に着いた。

体育館は便利な式場だ。入学試験から入学式、卒業式、何でも出来る。ここはバスケットコートが一面とれる程度の床面積だが、パイプ椅子を並べれば数百人は座れる。これに加えて、そして広くないが二階席があった。正面部分が保護者、両脇が教員に当てられていた。教員控え

ぎる。

#### 式次第

- ・ 開会の辞
- ・ 国歌斉唱
- ・ 入学許可報告
- ・ 学長式辞
- ・ 理事長祝辞
- ・ 来賓祝辞
- ・ 新入生宣誓
- ・ 在学生歓迎の祝辞
- ・ 校歌斉唱

と、以上が貼り出された式次第だ。

突如、場違いなファンファーレが館内に鳴り響いた。節回しは東京五輪のに似ているが、調律が合ってなくてへたくそだから、別の曲にきこえるのかも知れない。時折、ピピッと、とかプオおーとか、野獣のような異音が混じる。なんだか場末の動物園のようだ。うら寂しい気分になる。脳裏に浮かんできたのは、かつて通りがかった、とあるローカル・テーマパークの開門風景だ。パステルカラーの風船で飾りつけられた、しびいレンガ造りの

室で出勤簿にハンコを押してから、席に向かった。新参者としてどの当りに座るのが妥当なのか迷ったが、えいっ、と踏ん切り、最前列に陣取った。見下るすと、開会まであと一五分ほどなのだが、席がガラガラだ。保護者席もバラバラである。入学式に親が来る、なぞと驚いていたのは遠い過去の話だ。学生の大半は親の支えで学んでいる。国公立でさえ学費は、授業料だけで四年間に二〇〇万円を超える。私立になればその二倍、三倍は当たり前だ。喻え奨学金を貰ったにせよ、およそ成人をただ養っている構造は変わりない。今様に言えば、親たちは最上位の「ステークホルダー」なのだから、最上位席が与えられて当然なのだ。そう思いながら保護者席を見ると、諸氏、これからの四年間、のしかかってくる重荷を耐えているようにも見える。

正面の二階席を見ると、奥の方にホルンが見えた。吹奏楽団が入っているようだ。ラッパのクラブがあるのだろう。少々寂しい会場も、演奏が入ればちよつとは華やかになる、なんて期待した。

目を凝らすと、彼方のホワイトボードに式次第が貼ってある。達筆なのは分かるが、いかんせん、遠す

城門だった。ポップコーンが似合うメロディーに被せた、張り切った呼び込みと、録音された子ども達の歓声が、だれも居ない広場に響いていた。。。

バタバタと足音がした。階下を覗くと、小走り入ってきたいくつかの人影があり、その後に足取り悠然と小集団が続いた。ペコペコ周囲に頭を下げている先の教人は誘導の教職員で、ゆったり席に向かうのが新入生だと、まもなく分かった。湾岸辺りをデコ車で流してそんなアンちゃんたちが混じっている。それから学生席が少し騒がしくなった。会場の外では、映画の上映案内のようなアナウンスが流れている。

「まもなく入学式が始まります。新入生、保護者の皆様は・・・」

なにやら耳慣れぬ楽曲が流れてきた。8ビートの軽佻浮薄なメロディーだ。二〇年以上前のアニソンのようでもある。もしや、これが校歌なのか？後から聞いた話では、地元縁のあるJ・POP歌手に依頼して書かせた自慢の代物だそうだ。

音楽が止み、場内アナウンスが流れた。

「ただ今より、平成二五年度、明総学館東京国際情報

栄養人間総合科学大学入学式を挙行いたします。一同起立。」

緞帳がゆっくり上がってゆく。

「着席」

壇上に学長、理事長ほかのお歴々が現れた。度肝を抜かれた。ビッグサイトの幻影か？ なんともし派手な出で立ちである。学長は深紅色のガウンに金色の、他は黒ガウンにシヨッキング・ピンクやネオン・ブルーのサテンフードが付いている。帽子も英国の歴史ある大学の礼帽をまねながら、房飾りの代わりに旧日本軍の大礼服用の羽根が付いている珍妙なデザイン。殆どコミケのB級コスプレだ。これも後から聞いたのだが、新たな歴史を作るため、地元縁の「世界的に有名な」デザイナーに頼んだ式服だそう。ヨーロッパの伝統と日本の格式を融合した、ニュー和風デザインだ、という。昆布とスルメのサンドイッチ。考えるだけでアゴが痛くなった。

「国歌斉唱。全員、ご起立ください。」

吹奏楽団の、超スローなテンポに合わせて君が代を歌う。一拍が長すぎて「さざれ石」が割れそうだ。「石の

巖」じゃない、つてのに！

まずは、入学許可報告にて、本年度入学生の数が発表された。全学で552名。うちボクが直接面倒を見ることになる健康栄養科学部入学は104名だった。定員80に対して三割増しは、文備省から「お叱り」を受けないギリギリの数だ。正規合格者の「歩留まり」が予想より良く、補欠での調整に失敗した、というのが毎年のエクスキューズだった。

学長式辞が始まった。ついで理事長、来賓、保護者代表へと祝辞が続く。

学長は学者だ。学問は出来るのだろうがハナシが異様にへたくそだ。異常気象からSTAP細胞、果ては高倉健からレバ刺し禁止まで、とつちらかってスベリまくる。理事長は創立者家系の元ビジネスマンだ。歯切れは良いが、学問の香りは無い。世界金融・企業買収・電気料金・牛井値上げ・世の中カネだ、そんな内容。県知事の祝辞は副知事代理が代読した。内容は、いつどこかの学校で垂れても不都合ない訓示だった。どうせ原稿も秘書の作だろうから、代筆の代理による代読だ。屁ほどもありがたくない。およそこの手の祝辞は、白米

の握り飯に何を入れるか、程度の違いしかない。3つも食べれば飽きてくる。だいたい、誰もが挟みたがる小ネタは時事ものと決まっている。先を越された演者の焦る姿が唯一の楽しみどころだ。まあ、あまり突拍子もない御高説も困るのだが、入学祝辞の骨子はみな、以下の通り。

「桜咲く今日のおめでとう。これから四年、

期待するからベンキョしろ。」

そんな中でも少し感じるところがあったのは、保護者代表の祝辞だった。我が子に自らの体を食べさせるカバキなんとか、いう蜘蛛ではないが、老後資金を削って学ばせる親の思いが滲んでいた。学費がなんせ高いものなあ・・・学生諸君は分かっているのか？

これらを受けて、新入生宣誓と在学生・歓迎の辞。

「私達は・・・どうぞよろしく」

「みなさん・・・ようこそ」

教職員添削済みの文だろうが、「おかあさん、おとうさん」という語だけで、そのレベルも知れる。在校生の曰く「気軽に話せる先生はみな楽しい人」だそう。期待されてる教員像が、そこか。まあ学生は、上手く

言葉に出来ないだけで、心は学究に燃えている。そう信じよう。でなければ、こちらもうりきれない。

「校歌斉唱。全員、ご起立ください！」

向かいからまた、さっきのチャライメロディが流れてきた。ところが、前奏も終わって斉唱とおぼしき部分でも、とんと歌声が聞こえてこない。考えてみれば、そりゃそうだ。新入生は歌ったことがない。数少ない出席の在校生だつて大抵、所詮は二度目だ。大声で歌えるわけではない。その上に来て、この歌詞だ！座席に歌詞カードが置いてあった。こんなの小声でも歌う気がしない。「わーかい青春・はじけて翔んだ・イエーイ！めいそう・めいそう・・・」

めまいがして、疲れはピークに達した。

後日、一言、苦い感想を言ったら。学生部の委員会にも入れられた。ボクはこの先、一体いくつの委員会に入れられるんだろう。

〈続〉

<タイタニック委員会>

◆お断り◆この小説は全くのフィクション(作り話)です。登場する人物・団体・名称等はすべて架空のものであり、実在のものとはゼンゼン全く関係ありません。